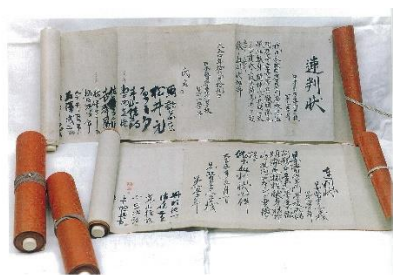


第1章：世界でも稀な歴史を持つ東京医科大学 107年の歩み

■血判連署の盟約により学生総退学

本学が設立された当時の私立の医学専門学校は、明治38（1905）年の医師免許規則改正により、設立後2年を経て設備や教育内容が整っていれば、卒業すると無試験で医師免許が授与される文部省指定校になりました。明治45（1912）年設立の日本医学専門学校（現日本医科大学）も指定校になれる前提で学生を入学させましたが、教育設備等の不備により指定校となることができず、学生が経営者側に誠意ある対処を求めましたが聞き入れられず、全面対決となり、大正5（1916）年5月16日、学生約450名が血判連署の盟約により総退学しました。

退学した学生たちは、広島県出身の学生が高橋琢也氏（元沖縄県知事、後の本学学祖）、島根県出身の学生が森林太郎氏（元陸軍軍医総監・作家森鷗外、本学初代顧問）、茨城県出身の学生が佐藤進氏（順天堂第三代堂主、元陸軍軍医総監、本学初代顧問）など同郷の有力者を訪ね、新たな医学校の設立を嘆願しました。これが本学の芽生えです。



血判連署

■学祖・高橋琢也氏と東京医学講習所開設

新しい医学教育の場を求める学生らの強い決意を知った高橋氏は、70歳で新たな医学校の設立のために立ち上がり、有力な援助者の支援を得て、大正5（1916）年9月11日、東京物理学校（現東京理科大学）内に東京医学講習所を開設しました。以来、高橋氏は、全私財を投げうち89歳で生涯を閉じるまで本学のために情熱を傾けて尽され、その熱い思いは、学祖として今も脈々と受け継がれています。



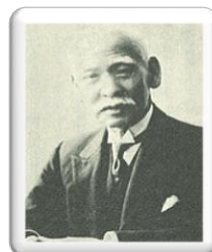
【学祖】
高橋琢也氏



【東京物理学校内に東京医学講習所を開設】
薬物医化学実習



森林太郎（森鷗外）氏



【初代顧問】

中濱東一郎（ジョン万次郎長男）氏 佐藤進（順天堂第三代堂主）氏



新医学校を作ることができたのは、大正デモクラシーの時代の流れに乗れたこと、何より順天堂から教授陣の大半が派遣されたこと、そして順天堂医院を臨床実習先として提供されたことが大きく、これは本学初代顧問で順天堂堂主の佐藤進氏の働きかけによるものです。また、高橋氏が少年時代に医学を志しながら貫けなかったことや、学生たちが総退学した前月に愛妻を亡くしたことも、学生のために余生を捧げようと医学校新設に心が動いたきっかけとなっています。

高橋氏は、農商務省青森大林区署長や山林局長など山林行政に長く関わり、森林法（国有林と私有林の区分け）の制定に尽力した後、沖縄県知事を務めました。JR青森駅西口より徒歩約10分にある青森市森林博物館（旧青森大林区署庁舎）の旧営林局長室に、高橋氏が当時使用していた机と椅子が展示されています。

■東京医学専門学校の設置認可と無試験開業指定獲得

高橋氏は、無試験開業の指定を獲得するため、東京医学専門学校の設立に向けて、全国を奔走して資金を調達するだけでなく、土地や家屋など全私財を投じました。また、設立の支援には、大隈重信氏、原敬氏、犬養毅氏、高橋清氏、北里柴三郎氏、渋沢栄一氏など歴史的人物が関わっていたことも忘れてはなりません。

その努力の結果、大正7（1918）年4月11日、文部大臣から正式に医学校として東京医学専門学校の設置が認可され、初代校長に佐藤達次郎氏（順天堂第四代堂主、順天堂大学初代学長・初代理事長）が就任しました。2年後の大正9（1920）年4月13日には念願の無試験開業の指定を獲得しました。



大正 6 (1917) 年 6 月 校地購入



東京医学専門学校初代校長
佐藤達次郎氏



大正 9 (1920) 年頃
東京医学専門学校校舎 (右) と附属博済病院 (左)

東京医学専門学校の設立にあたっては、学生が総退学して経営危機に陥った日本医学専門学校と東京医学講習所の学生を救済しようと、立教大学により医学部の設立が計画されましたが、第一次世界大戦で寄附金が集まらず断念した経緯もあります。

東京医学専門学校は、大正 7 (1918) 年、内科系の臨床実習病院であった中濱東一郎氏 (ジョン万次郎長男、初代顧問) 経営の回生病院を買収し、新宿キャンパスの地に移築して附属博済病院を開設しましたが、大学昇格に向けて土地が狭隘であったため、昭和 6 (1931) 年、西新宿に淀橋診療所 (現東京医科大学病院) を開設しました。

昭和 2 (1927) 年には長野県松本市の上高地に診療所を開設し、日本における山岳医療の草分けとなりました。

■東京医科大学への昇格

昭和 17 (1942) 年に文部大臣に大学設立を申請しましたが、太平洋戦争のため取り下げられました。

昭和 20 (1945) 年、終戦後に GHQ (連合国軍最高司令官総司令部) のマッカーサー司令部は、大学と医学専門学校の 2 重構造になっていた医学教育体制を是正し、教育の均一化を図るために、2 段階 (A 存続、B 廃校) の格付けをして改革を行いました。そのために本学は、本学出身の教授が全国の校友を訪ね、学生たちも校友や父兄をまわって寄附金や医学書、医療機器の寄附を集め、戦争で傷ついた基礎医学教室 (現第一校舎) の改装を行った結果、A 評価を得ることができ、昭和 21 (1946) 年 5 月 15 日に東京医科大学の設立が認可されました。初代学長には、緒方知三郎氏 (日本の近代医学の祖・緒方洪庵の孫、文化勲章受章) が就任しました。

学校教育法が昭和 22 (1947) 年に制定され、新制医科大学として本学が再発足するにあたり、病床数不足が問題となりました。昭和 24 (1949) 年 10 月に霞ヶ浦病院 (現茨城医療センター) を開設して病床数を増やしたことにより、昭和 27 (1952) 年 2 月、新制の東京医科大学が認可されました。



昭和 17 (1942) 年 東京医学専門学校



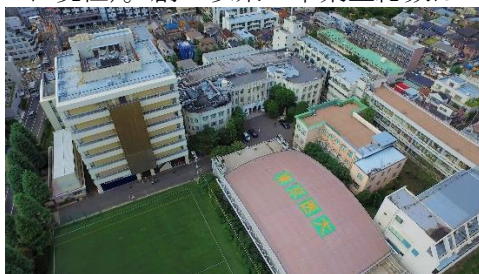
東京医科大学初代学長
緒方知三郎氏



昭和 29 (1954) 年 東京医科大学

■建学の精神「自主自学」、校是「正義・友愛・奉仕」のもとで、社会に恩返しをする

その後、大学院設置、看護専門学校 (後に看護学科設置により閉校) と霞ヶ浦看護専門学校の設立、八王子医療センター開設、医学総合研究所 (初代所長: 中嶋宏 WHO 名誉事務局長・第 4 代 WHO 事務局長・本学卒) 開設、看護学科設置など、施設設備や組織が拡充されて現在に至っており、学生数は約 1,500 名、職員数は全施設で 5,930 名です (令和 5 (2023) 年 1 月 1 日現在)。創立以来の卒業生総数は 19,428 名 (医学 12,983 名、看護学 6,445 名)。



令和 3 (2021) 年現在

本学の建学の精神は「自主自学」で、校是として「正義・友愛・奉仕」を掲げています。特に校是は、本学設立時の学祖 高橋琢也氏をはじめとした社会からの熱い支援に応え、社会に恩返しするために、正義、友愛に加えて、他に類例のない“奉仕”という言葉を加えるに至ったと思われまます。この歴史的な事実は、今後においても、本学の精神的な支柱であり続けることが肝要です。